

講義「異文化交流の歴史」

— その構想と展開 —

中 村 啓 佑

Plan et réalisation du cours :
« une histoire des échanges culturelles »

Keisuke NAKAMURA

はじめに

本論は『教育研究所紀要 第22号』に掲載した「大人数講義に挑む——いくつかの試み——」¹⁾と対をなすものであって、講義「異文化交流の歴史」を対象とする。先の論文がどちらかと言えば授業の方法論であったのに対して、本論は授業の目的論から出発している。すなわち、この講義が「何を目的としているのか」、そして「なぜそうした目的が必要であるのか」を確認することが本論の第一の課題である。

であれば、本論はむしろ「大人数講義に挑む——いくつかの試み——」よりも先に書かれるべきではなかったのか。なぜ講義開設前ではなく、開設後3年を経た今書かれるのか。それは、開設当初に考えていたことがらが、まだ現実と触れ合うことのない抽象論であって、もし論を展開するならば、きわめて観念的なものになった恐れがあったからである。実際のところ、筆者が講義開設以前に意図していたことは、講義内容を練り上げ、プレゼンテーションに工夫し、受講生とのコミュニケーションの方法を模索する過程でより明確になっていった部分もあれば、逆に、現実との対応の中で修正を余儀なくされた部分も少なくないからである。本論は基本的には目的論であるとはいえ、現実をくぐりぬけてきたという意味で多分に方法論を含んでいると言えよう。実際、方法論を含まない教育論は無意味である。

したがって本論の構成は、目的論から方法論へ移行する二重性を如実に映している。前半部の1章、2章は目的論的傾向を、最後の4章、5章は方法論的傾向を帯びていて、中間の第3章が抽象論から具体論への架け橋の役割を果たしている。具体的に言えば、まず第1章においては、類似の講義「異文化交流とコミュニケーション」との違いを明確にしつつ、本講義のねらいを明かにする。第2章では、そのねらいから出発して、なぜ文化の多様性、重層性、流動

性が中心的思想であるかを明らかにし、その結果、どのようなプログラムを準備するに至ったかを略述する。第3章では、講義のテーマ「海を渡る」を、第2章で説明する中心思想との関係で説明する。第4章からは方法的特色に入り、学生の想像力を養うために、どのような工夫をしているかを具体的に述べる。最後第5章では、想像力を養う方法の一環として文学作品と映像作品をどのように利用しているか、またそれらの効用がどのあたりにあるかを論じる。

文化の多様性、重層性、流動性が講義の中心思想であるとするならば、想像力の養成は個々の具体的授業の課題であり、内容と方法を規定する。

第1章 講義が対象とする地理的、時間的範囲

「異文化交流」とは、空間的にも時間的にも非常に幅の広い概念である。地理的にはすべての地域を含んでいるし、時間的には通時的かつ共時的であって、すべての時代にわたっている。「交流」の語は、一般的には友好的で意図的な関係のもとでの、人、モノ、思想、技術などの往来とその結果・影響を意味するのであろうが、筆者はこれをもっと広く解釈し、文化どうしの衝突とその結果までを含めて考えている。

ちなみに、「異文化（間）コミュニケーション」はあくまで共時的問題であって、複数文化間相互の理解と意思疎通がどのような問題をはらんでいるか、またどのように行われるべきか、さらに相互の理解と意思疎通はどのような結果をもたらすのかが問題になる。特に異文化（間）コミュニケーションに関する学問が関心をもっているのは、現代的、現実的な問題である。現代世界において、特定の文化圏に属して生活する個人や集団が、どのようにすれば外来の文化と容易に対応することができるか、また他の文化圏内に生活する個人や集団が、どのようにすれば、容易に相手文化に適応することができるかがこの学問の課題である²⁾。

このように、「異文化（間）コミュニケーション」に比べて「異文化交流」ははるかに広い概念であるから、その歴史は、厳密に言えば、すべての時代と地域にわたる複数文化どうしの衝突、接触、伝播、移出入、さらには一般的に言われる友好的文化交流に関する出来事とその結果・影響にまでかかわるはずである。しかしながら、すべての時代、すべての地域、すべての文化を扱うことができるはずもなく、ましてや半期の講義という制限を考えれば、時代的・地理的に問題を絞らざるをえない。

まず、地理的には日本列島に軸を置くことにした。それには二つの理由がある。

一つは筆者の関心の問題である。すでに筆者はアジア文化学科の講義「日本と異文化」において幕末から明治にかけてのわが国における異文化移入の問題を扱ってきた。第二に、受講者が生きる場に直接かかわる問題を扱いたい、すなわち受講者に自分自身の問題として受け止めて欲しいと考えたからである。私達の暮らしている日本列島という空間は、どのような位置に

あり、時代時代においてどのような様相を呈し、またどのような役割を果たしてきたのかを異文化交流という現象を通じて実感して欲しかったからである。

一方、時間的には、古代から近代までを射程に入れることにした。これは時間と筆者の能力からしてあまりに無謀であると言えなくもない。ただ、共通科目であることを考慮に入れるならば、限られた事実や時代について深く精密な研究を紹介するよりは、文化移入の問題をできるだけ広い時代にわたって紹介することによって、今日の世界生活と物質生活が、いかに多種多様な異文化から影響を受けているかということ知らしめたい、その意味で学生たちに新鮮な驚きを与えることができればと願ったからである。

そうした願望に至ったのは、ここ10年あまりの講義経験において学生一般の意識が非常に硬直していることを痛切に感じたからである。すなわち、学生とのやりとりの中で、また彼らが書いたものを通じて、現在日本列島にくらす人々の考え方やくらしぶりが、長い間、ほとんど変わっていないかのような考えに出くわすことが多かったのである。現在の日本という国家の政治形態や地理的境界は言うに及ばず、日常の私たちの生活実態を含めて、すべてが今あるような形であり、すべてがもともとから日本列島にあったかのような錯覚をいだいて、それを疑おうとしない学生は決して少なくなかったからである。具体的に言うと、それはどういうことであるのか、そして、それにどう対応すべきなのか次章の問題である。

第2章 文化の多様性、重層性、流動性

1. 一つの民族、一つの言語、一つの文化？

確かに、学生たちは仏教伝来、鉄砲伝来、キリスト教伝来、文明開化というような個々の歴史的事実を学び、さまざまな文物が外からやって来たということを知らないわけではない。しかしながら、それによって日本列島に住む人たちの生活と意識がどのように変わったのか、また変わらなかったのかということは、あまり考えようとしていないのではないか。それが10数年にわたる講義を通じての率直な印象であった。

例えば、「国民」とか「国家」という概念にしたところで、それが近代におけるきわめて新しい概念であるにもかかわらず、江戸時代の政治について語ると、「なぜ当時の国民にその事実を知らせなかったのか？」とか、「国民はその問題をどのように考えていたのか？」というような質問に出くわすのである。しかも、そうした質問をするのは講義内容に強い関心のある学生なのであるから、ましてや関心の低い学生層にあっては、日本列島における政治構造の変化、社会的変化、生活の変化、それらにともなう意識の変化についてどのようなイメージを持っているのか、きわめて心もとないと言わねばならない。

多分彼らの頭の中には、原始時代は別としても、はるか昔のある時点から日本という近代国

家とその構成員である国民が存在して今日まで来ているというような思いが強いのではないか。東北地方以北、南九州、琉球諸島には、それぞれ異なった民族が生活していて、さまざまに異なった文化をもっており、近畿の政権が本州をほぼ支配して以降も東北の北端や北海道には、長い間支配が及ばなかったという事実、西日本と東日本は、長い間別々の文化をもち、西日本の実質的支配は長い間東日本に及ばなかったという事実、そして、原始時代から今日に至るまで、さまざまな集団とその文化が幾度も海をわたって日本列島に到着し、そこにあったさまざまな文化に影響を及ぼし、今日日本と呼ばれる地域の生活が少しずつ形成されていったという事実について、どれほど彼らは知っているのでしょうか。

今私達が日本文化の代表と考えている文楽や歌舞伎はほんとうに日本のオリジナルな演劇形態であるのか？ 日本食と考えられている寿司やてんぷらは、ほんとうに元からあった日本の食べ物なのか？ 日本人の調味料と考えられている味噌や醤油は、はたして私たちの発明なのか？ 私たちの食べている米そのものはどうなのか？ そんなことを考えてゆけば、私たちの食生活の中でもともと日本列島にあったものなどごくわずかになってしまう。

にもかかわらず、現代の日本には、純粋な日本文化とか、純粋な日本人とかが存在するのかなような一元的思考がはびこりかねない状況である。もちろん学生のすべてがそうした一元的思考にとらわれていると言っているのではない。ここで言いたいのは、日本列島における文化の多様性、重層性、流動性についての明確な意識をもたないでいると、ともすれば純粋な文化とか、純粋な日本人とか、単一民族国家とか、単一言語国家とかを喧伝するイデオロギーにとりこまれてしまいかねない危険性があるということである。

2. 構想とプログラム

古代から近代までを射程に入れるという無謀なことを考えたのも、以上述べたように、現代の日本列島が含むさまざまな文化が一举に出来上がったものでも、古くから存在するものでもなく、長い時間の中で少しずつ変化してきたものであること、それも、さまざまな異文化の影響のもとにそうなったのだということ、すなわち、日本文化における多様性、重層性、流動性というものを知って欲しいと考えたからである。そして現代のさまざまな社会現象や文化現象を考えると、それは、先住の文化との混交をくり返した結果であることに思いをいたして欲しいと願ったからである。

しかしながら、古代から近代までの異文化交流の事実やそれに関する説明を半年間で列挙して学生の理解が得られるはずはない。また仮に、その内の代表的なものだけを取り上げて解説するとしても、あまりに多くの事項に圧倒されるか、ただ退屈するだけになるのは容易に想像できることである。であるなら、とうぜん学生の興味を引くような内容を選んで、いくつかの小テーマとする必要がある。そして、何よりもまず、それらの小テーマを選ぶ基準となるよ

うな大テーマが必要となろう。そこで筆者が選んだのは「海を渡る」というテーマであった。

このテーマをもとに、まず多くの人知っているような人物、それも異文化交流に深くかわり、ロマンが感じられるような人物をそれぞれの時代から選ぶことにした。そして最終的に浮かんだのが、日本列島から異文化を求めて海を渡った人々と、異文化をたずさえて日本列島にやってきた人々のベアーを作り、その人たちを中心に異文化交流の流れを概観しようとする大筋であった。

こうした思索の結果できあがったのが以下のような人物のリストであり、それをもとにしての授業予定であった。以下は今年度のシラバスからの抜粋であるが、最初の年とそれほど大きく変わっているわけではない。

プログラム

はじめに 授業のねらい —— 文化の流動性、重層性、多様性

1. 北から南から —— 自文化/異文化の境界
 2. 海を渡るということ —— 鑑真と空海
 3. 初めて日本を見たヨーロッパ人と初めてヨーロッパを見た日本人
 4. 漂流した人々 大黒屋光太夫とジョン・万次郎
 5. 幕末の往来 ベリーと吉田松陰(?), 福沢諭吉
 6. 留学生と外国人教師 津田梅子とラフカディオ・ハーン
- おわりに 国際化ってなに —— 開く時代と閉じる時代

第3章 「海を渡る」ことの意味

1. 海の役割

先の章では、この授業が文化の多様性、重層性、流動性を理解してもらうことであり、そのことによって、ともすれば学生たちが抱こうとする一元的な文化観に代えて多元的文化観を提供することであることを述べた。文化の多様性、重層性、流動性は講義の底を流れるいわば主旋律であり、基本的思想ということができるであろう。それに対して、「海を渡る」は、内容全体を比喩的にも実体的にも表すことのできるようなテーマ、小説で言えばタイトルというべきものである。誤解を恐れずに言うならば、本講義は、異文化交流に貢献した人々を主人公とし、日本列島を舞台に繰り広げられるオムニバス・ドラマとして構想されたと言える。そのタイトルが「海を渡る」であり、そこで訴えたい思想が文化の多様性、重層性、流動性である。

底を流れる文化の多様性、重層性、流動性という思想と「海を渡る」というタイトルのもつ

イメージは、日本列島に住む人間たちにとっての海の役割を考えると、一見相反する意味をもつように見えるかもしれない。というのは、「海を渡る」というイメージの背景には、「海は人と人とを隔てている役割を果たす、われわれを取り巻く障壁」³⁾ であり、日本という国は孤立した島国なのだという一般的で従来の考え方が横たわっているように感じとられても仕方がないからである。

それに対して、さまざまな文化が幾度にもわたって日本列島にやって来て、既存のさまざまな文化の上に重なり、そこにまた新しい文化が生み出されるという考え方は、少なくとも、「孤立した島国」という考えとは逆の考え方に支えられているのである。すなわち私たちの考えは、「海は非常に柔らかい自然、交通路」⁴⁾ であり、海の交通路は対馬方面では朝鮮半島と、琉球諸島を経由して大陸と、また千島列島、樺太、沿海州を伝ってここでも大陸とつながっているとする網野義彦の歴史観に多くを負っている。それは、公式の記録にはほとんど現われなけれども、沿岸にくらす人々、島々にくらす人々にとって、朝鮮半島や大陸への海の道は、一般に考えられる以上に頻繁に使われ文化を運んだというものである。筆者が以前から漠然と抱いていた日本文化の多様性、重層性、流動性という考え方は、まさにこのような網野史観に出会うことによって強固なものとなったと言っても過言ではない。

したがって「海を渡る」というタイトルをつけるのは、決して海が自然な交通路であるという考え方を否定するからではないし、海が「われわれを取り巻く障壁」であって日本を孤立させていると考えるからでもない。ましてや、その孤立した日本が幾住にもわたる異文化の影響を受けることなく孤高の文化を守り続けてきたなどと言うためではない。

2. 現実の距離どう実感するか

筆者があえてこのタイトルにこだわったのは、学生たちに日本列島の位置を再認識してほしいからである。言い換えれば、日本列島のある場所（例えば九州）と大陸との距離を、現代の感覚ではなく、古代人、たとえば遣唐使に加わった人たちの感覚で測って欲しかったからである。造船の技術が未発達で、航海術をしらず、気象に関する知識がきわめて乏しかった時代の人たちにとっては、日本を出発して大陸に渡るまで、風の具合がもっとも順調であれば1週間、でなければ1ヶ月以上もかかり、それも出発した船の多くがたどりつけない運命にあった。波頭にもまれ、もう吐くものの何ひとつない体で転げ廻り、なすすべといっては神仏に祈るだけの暗い船底に身を置いて欲しかったのである。

私達は今やその距離をわずかに数時間という飛行機の時間でしか感じ取っていない。ジェットエンジンという最新の動力を使って空中を飛ぶ時間でしか換算していない。しかし、木の板を打ち付けただけの、風を頼りに進む小さな船は、人間の意志に従うのではなく自然の力に従わざるをえなかった。それは、人間が動力を発明するはるか以前のことであって、船という手段

はまだまだ人間の素手の能力を大きく超えるものではなかったから、それだけの時間を必要とし、それだけの危険を賭けざるをえなかったのである。それは、海という自然が隔てた距離であり、海という自然がはらむ危険であった。最新の航空技術が可能にしてくれる「一飛びの快適な時間」ではなく、危険に満ちた、不確かな、たどりつけば僥倖とさえ思われるような、九州と大陸との間に要するその果てしない時間、その自然が隔てる距離に思いを致して欲しかったのである。

時代が数百年を隔てても、事態がそう大きく変わったわけではない。嵐に遭遇すれば船は沈没するか、帆と舵を失って潮流に流されるままであった。そうした船は、ある場合は大陸に、ある場合には八丈島の孤島に、またある場合にはアムチカ列島（アリューシャン列島）にたどり着いたのである。ジョン・万次郎や大黒屋光太夫を異文化交流の登場人物としてリストに加えたのは、もちろん、彼らが自分の意図にかかわらず異文化を紹介することになったという意味で異彩を放っていたからでもあるが、彼らの運命を大きく変えたのが漂流という事実だからである。万次郎の場合、土佐を出てから八丈島の孤島に漂着するまでの約10日間、大黒屋光太夫の場合には、7ヶ月の間、海の上を漂っていたのである。

蒸気機関が発明され外輪船となっても、咸臨丸はサンフランシスコまで1ヶ月以上の時間を要している。そしてそれは、せいぜい今から150年前のことなのだ。このことから、少なくとも二つのことが言える。一つは、150年前の人たちにとって太平洋を渡ることはそれほど時間のかかることであり、太平洋はそれほど大きな海なのだということ。そして、もう一つは、この150年の間に、かかる時間はわずかに10時間に短縮されたのだということである。一方で当時の人々の不便さ、一方で科学技術の加速度的で驚異的な発達、この両方にまたがる事実を伝えることで、いずれも驚きを与えることができるのではないか。

驚きこそは知的好奇心を目覚めさせ、新たな事実の探求へと向かわせる原動力である。私達の生きる場を基準とし、そこから過去のさまざまな事実を通じて現実の距離と、自然の驚異と、そしてそれを克服してきた人間の力を考えさせること、これこそ大学の講義、特に共通課目の講義に求められることではないであろうか？

第4章 想像力の欠如と対応

1. 状況を想像させる質問——遣唐使船乗り組み員の場合

第2章においては、学生たちの日本に関するイメージが一元的であり、固定的であることを説明した。そのことと深く関連しているもう一つの顕著な現象は、想像力の欠如である。現在の自分たちの生活を基準とするあまり、過去の人物たちの状況に身を置いてみるのが苦手なのである。その人物たちがどんな風に暮らしていたのか、彼らは何を食べ、何を着て、どんな

講義「異文化交流の歴史」

ところに住んでいたのか、彼らの世界に関する知識はどのようなものであったのかについて、具体的なイメージを浮かべることが難しいらしい。

この章では、どのような質問を準備し、どのような問い方をし、どのような宿題を出すことによって想像力を養おうとしてきたかを、実際の授業に即しながら見てゆきたい。

当事者たちの状況を想像してもらっても、予備知識のまったくないところで突然に情景が浮かんでくるはずもない。例えば遣唐使船の場合であれば、使節を一回派遣する場合、どのくらいの大きさの、何艘の船に乗って、何人ぐらいの人たちが、どのような海路を伝って海を渡ったのかということの説明し、地図や船の復元図などを見せる。その後で、「船にはどのような人たちが乗っていたと思いますか、考えてください」という質問をする。

こうした質問は、知識よりも想像力の問題である。たとえ知識として知らなくても、その状況ではどういう人間が必要かを考えさせることが目的なのであるから、とにかく必要と思われる種類の人たちを想像してもらおう。要求している答は当時の名称ではなく、現代的な名称でもいいし、「こういう人」という説明的な言い方でかまわない⁵⁾。いろいろな答がでるが、使節とその従者、船乗り、留学生、僧侶、通訳あたりまでは考えが及ぶらしい。

そのとき、ここでいう通訳が必ずしも中国語の通訳ではなく、琉球諸島の島々を航海するための通訳であると言うと、学生たちの間に驚きの表情が浮かぶ。共通語の存在をとうぜんと考える学生たちは、明治になるまで異なった地方の人々が意思疎通をすることは非常に難しかったこと、それほど方言の差が大きいこと、そして九州を離れば、その傾向はいつそう強かったことなどを知る機会に恵まれなかったようである。現在日本と呼ばれている地域は言語的にも非常に多様なのだということを理解してもらおう格好の機会である。

船大工については、少しヒントを与えると答えられる学生もいる。しかし、陰陽師が乗っていたことまでは考えが及ばない。学生たちはテレビや映画で安倍清明や陰陽師の存在を知っている。しかし、現代の私たちが科学的知識に依拠するように、当時の人たちは占いを基準に行動していたこと、同時にそれはまた呪術に対する信頼がきわめて強い社会であったことについての認識は明確ではない。

奈良の都の伽藍や仏像なども確かに文化には違いないが、陰陽道を頼りとし、祈りをもって運命変えようとし、呪術をもって人を不幸におとそうとした人々、災害が起これば非業の死を遂げた人たちの祟りと考え、加持祈禱で免れようとした人々、その人々の思考様式や生活様式もまた文化の一環なのである。

加持祈禱は病をなおすのにも用いられた。しかし、そうした神秘的方法の一方で薬も用いられたことは確かである。薬やその製造方法はどこから来たのか、それこそ遣唐使たちが運んできたものであり、鑑真らがもたらしたものである。鑑真は仏典だけをもってきたのではない。日本に砂糖を初めてもたらしたのも鑑真であると伝えられている。異文化とは仏典であると同

時に、それまで知らなかった砂糖の甘みでもあったのだ。

2. どのように状況を克服したか——大黒屋光太夫の場合

大黒屋光太夫の場合には、もう一步進んだ作業をしてもらうことを学生たちに要求した。それは、自分自身が大黒屋光太夫になったと仮定して、漂流やアムチカ列島での生活、シベリアの生活をどのように乗り切ったかを、自由に想像して書いてもらおうとしたのである（これは2004年度の講義における宿題である）。

先の遣唐使船の場合と同様、大黒屋光太夫について漂流の経緯、アムチカ列島での生活、シベリアでの生活についてある程度の予備知識を与えておいたことはもちろんである。その上に立って「自由に」書いてもらおうというわけである。A4用紙1枚程度ということで量的には多いとは言えなかったが、これは学生たちにとってかなりハードな宿題であっただろう。さまざまな理由が考えられるが、彼らによれば、まずこの種の作業をした経験がないから、何をどう書いていいかわからない。次に、漫画世代の彼らにとっては、文章である種の物語を作るといのは苦手である。その結果どうということになったかという、およそ3、4種類の文章が出てきた。

第一に、これはきわめて少数であったが、とにかく自分流に小説の一節を作り上げた学生である。事実にとらわれず、文字通り想像力を働かせている。第二は、授業中に述べたことや、インターネットで調べたことの中から、「状況を克服した具体的な事実」を、時系列でまとめたもの。こちらの要求からは少しはずれているが、自分のできる範囲で答えようとしているので誠実さの感じられる仕事である。これには、うまくまとめているものと、そうでないものがある。最後は、とにかく提出すればいいという、量的にも質的にも誠実さの感じられないものである。

提出された宿題を見て、ただ一つ明らかに収穫であると感じたのは、多くの学生がコミュニケーションの問題に関心を示し、程度の差はあれ何らかの記述をしていることであった。すなわち、アムチカ島に漂着したとき、島に来ていたロシア人たちとの間でどのようにして意思や感情を通じさせたかということであった。というのも、ロシア語をまったく知らない光太夫たちがどのようにして次第に話せるようになったかについては説明をしなかったから、これについては何らかの想像をせざるをえなかったのである。

しかし、学生たちがその状況に身を置くことによって実感したのは、コミュニケーションが決して言語だけによるものではないこと、まなざし、ほほえみ、表情、仕草などの身体表現が、いかにコミュニケーションにおいて大きな役割を果たしているかということである。そうした想像の世界において感じとったことがらを果たして「実感」ということばで呼べるのかどうかは疑問であるが、少なくとも単に知識として教えられること以上に深く、自分の問題として理

解したのではないだろうか。

最後に、ペリーが浦賀に上陸したとき、アメリカの将官や乗組み員は日本人のどういうところに興味を示したか、逆に日本の武士や民衆はアメリカ兵のどういうところに興味を示したか、軍艦に乗船する機会をもった武士たちは、何に驚き、何に興味を示したかを考えさせる問題は、当時の双方の文化の違いを理解させる上で大いに役立ったことを付け加えておきたい。いずれにしても、想像させて、それを補う形で導入する知識の方が、何も受け皿のないところに大量に充填する知識よりもはるかに定着しやすいのである。

第5章 文学作品と映像作品 —— 想像力を養うために

先の章では、学生たちが歴史的状況を考えるにあたって、あまり想像力を働かせようとしないうことを指摘した。想像力の欠如の背景には、まず知識の欠如があるかもしれない。想像の種がなければイメージは浮かんでこないからである。しかし、それ以上に、初等教育から高等教育まで、想像力を養うような教育が十分に成されていないことも指摘しなければならない。それについては別の稿で論じることにして、この章では、登場人物たちが経験した状況や彼らが見た風景、彼らが使っていた文物、彼らが交わした会話などを喚起させる方法として、小説をはじめとする文学作品と映像作品をどのように利用したか、さらにまた、具体的なイメージの再現として、どのような映像資料を用いたか、それらはどのような効用が期待されるのかを見てゆきたい。

1. 文学作品、特に小説の利用

本講義の骨格となるプランは、「日本列島から異文化を求めて海を渡った人々と異文化をたずさえて日本列島にやってきた人々のペアーを作り、その人たちを中心に異文化交流の流れを概観しよう」ということであった。確かにそれは一見無謀な企てであるように思われた。というのも、担当者が調査・研究したことがらをまとめて口述するだけならば、担当者にとっても膨大な作業でろうし、また、口述されたことを聞き、理解し、記録するだけならば、学生にとっても非常に退屈な作業となることが予測されたからである。

しかしながら、あえてこの無謀に見える企てに取り組んだのは、学生の理解を助け状況の想像を助ける補助手段が使えるであろうという予感が働いたからである。補助手段というのは、文学作品、特に小説であり、さまざまな映像であり⁶⁾、さらにはビデオで放映できる映画の場面、歴史をテーマにしたテレビ番組であった。

特に文学作品についてのひらめきは早かった。というよりはむしろ、これまでに読んで強い印象を受けた数々の作品、あるいは、まだ読んではいないが使えるような作品が先に頭の中に

あって、これが核になって講義の全体構想が生まれたと言っても過言ではない。一例をあげれば、井上靖『天平の甕』の一節などは、読後数十年たった今も鮮やかに浮かんでくるほどである。こうした適切な数節を学生に読ませることによって、担当者の説明よりもはるかに鮮やかなイメージを与えることができるのではないかと考えたからである。思いついた作品のリストは以下のようなものである。

鑑真：井上靖『天平の甕』、空海：司馬遼太郎『空海の風景』

ルイス・フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』

大黒屋光太夫：井上靖『おろしゃ国酔夢譚』

ジョン・万次郎：井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』

他に漂流関係としては、吉村昭『漂流』、『アメリカ彦蔵』、幕末関係では、福沢諭吉『福翁自伝』、ペリー関係では『ペリリ提督日本遠征記』

作品のジャンルと性質は多様である。一口に小説といっても、『天平の甕』や『おろしゃ国酔夢譚』のように、いわゆる歴史小説もあるし、『空海の風景』のように随筆的要素を含んだ伝記もある。また井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』のように子供向けに書かれた作品も入っている。しかも小説だけではなく、『福翁自伝』のように口述筆記による自伝や、『ペリリ提督日本遠征記』のように部下の手になる航海記録のようないわば歴史的資料も含まれている。したがって、文学ということばを *littérature* のもっとも広い意味、すなわち「書かれたもの」というように理解して欲しい。

それはともかくとして、なぜ小説を読ませるのかといえば、今述べたように鮮烈なイメージを与えるためであると同時に、もう一つ大事なことは想像力を養うためである。先の章では、登場人物たちの状況を想像させる習慣をつけるために質問や宿題に工夫をこらしたと述べた。それはそれで意味のあることであるが、学生たちにとって決して簡単なことではなかったし、ともすれば知識の欠如から、事実と大きく離れたイメージを作り出してしまうことは少なくなかった。

それに対して、歴史小説はかなり綿密な資料に基づいて書かれている場合が多いので、そこに表現されている生活様式や思考様式は、現実のものとかかなり近いと言って差し支えない。かててくわえて、小説家には想像の自由が許されているので、首尾一貫した、全体的人間像を描くことができるばかりか、登場人物の言動をドラマチックに展開することができる。読む者は、ことばが喚起する音声イメージに沿いながら、その向こうに視覚的イメージを描き、自分流の絵巻物、自分流の映画やテレビドラマを作り出すことができる。それがまさに筆者のいう「想像すること」である。ことばの向こうに無意識に絵を描く作業は想像力の養成に大いに力とな

るであろう。『天平の甕』や『おろしゃ国酔夢譚』を読む100人の読者は、100とおりの鑑真像、光太夫像をもつであろう。そして物語の展開と主人公の言動は学生たちにさまざまな刺激を与え、彼らの意識世界を大きく広げるはずである。

2. 映像作品と想像力

それに対して、テレビや映画の場合には事情は異なる。そこにはすでにイメージが、しかも連続するものとして与えられているばかりか音声まで聞こえてくるので、見る者は画面に現れる登場人物を一種の擬似実像としてとらえかねないし、そこに表現される世界を、ともすれば、それぞれの時代の忠実な再現と考えかねないほどである。それほどに、見るものの想像力の入る隙間が小さいように思われる。

確かに、文字が構成する文学作品に比べて映像で構成されるテレビや映画では、視覚的に見て想像の余地が少ないことは明白である。しかしながら、テレビや映画が想像力をまったくかき立てないわけではなく、想像力に対する働きかけ方が異なると言った方が正しいと思われる。

まず音声として伝達されることばであるが、登場人物がどう感じているのか、何を考えているのか、すべてをセリフにして語るわけではない。また仮に説明やナレーションが入るとしても登場人物の心中すべてを語りつくすことができるわけではない。見るものは、現実の世界でそうしているように、コンテキスト、表情、身振りから登場人物の感じ方や考えを想像しなければならないのである。しかも、現実の言語世界がそうであるように、ことばどおりの意味にとることはできず、言外の意味や、反対の意味やときには発言者の嘘さえ類推しなければならない。その意味では、ことばをつらねる文学作品の方が人物の内面を描出しやすく、映像の作品に比べて、想像の余地を残さないとさえ言える。

一方、イメージについて言えば、一人の人物についてすべてを描けるわけではなく、一定数の場面を選ばなければならないから、画面に現われなかったもの、すなわち、画面と画面の間の出来事、物語が始まる以前と終りの後は見るものの想像に任されることになる。これを埋め欠落部分をつなぐことも、想像力なしでは不可能であろう。

さらには、印象に残ったテレビ番組や映画作品の場合、私たちはそれを意識の中で反芻する。そして反芻するたびに、イメージはおぼろげなものとなり、最初のイメージにはなかったものが加わってきて次第に元のイメージから離れて行く。しかも反芻しながら、私たちは自分流の解釈や評価、判断を重ねている場合もある。久しぶりに見た映画のシーンが、自分の考えていたものとかかなり違っていた覚えはないだろうか。それは記憶が薄れているというよりは、もとのイメージが自分の中で変わっていった証拠なのではないか。あるいはまた、ときによっては、何時の間にか登場人物の誰かれに自分を重ねている場合もある。受けとったイメージから別のイメージへの、こうした心像の変化や変化の過程で現われるさまざまな内なる声もまた想

像力の産物なのである。

想像力という点から考えて、私たちが映像作品に期待するのは、まさにここなのである。一つの作品、あるいは一つの場面は、映し出される映像は同じだとしても、それを見る側はまったく同じ見方をするわけではなく、それぞれの見方で見るのである。すなわち、それぞれの過去の経験を背負いながら、それぞれの未来を投影しながら見るのである。だからこそ、ある者にとっては、同じシーンに何も感じるものがなく、別の者にとっては、その同じシーンが生涯忘れられず、またある者にとっては、未来の行動を決定するほどの迫力をもつのである。もちろん、教室で見せるのはフィクションではなく、歴史的事実に基づく映像ではあるが、見るものの想像力をかき立てることには違いがない。

最後に、ここには詳しく触れなかったが、映像のもつ情報量について無視するわけにはいかない。一枚の写真は、ことばにすれば何万語の情報量をもつという。ましてや連続する映像作品の情報量が、講義中に流れることばに比してはるかに多いことは言うまでもない。しかし、授業に映像作品を用いるのは、そのためだけではない。学生の注意力がまったく違うのである。ビデオを流し映像を見ると、学生は恐ろしいまでの集中力を見せ、話を聞いているときとまったく違うのである。正直なところ、そのときぐらい自分の話術の無力さと、うまく制作された映像作品のもつ力の差をひしひしと感ずることはない。それはともかく、視聴覚教材の教育的効用については稿を新たに論じる必要がある。

お わ り に

壇上から下に向かってことばが流れ、それを必死になって書き留めるような講義は19世紀の知的遺物である。当時書物は誰の手にも入るものではなかったから、専門家が書物から得た知識をかみくだいて学生に口述しなければならなかった。しかし、科学技術が発達した現代、知識を得るだけのためならばインターネットとテレビによる遠隔授業だけでこと足りるのである。対面授業でしか得られない何かが用意されていないなら、何十キロの道のりを朝早くから大移動してくることに何の意味があろうか。その「何か」こそ、初めて講義に取り組んで以来筆者の求めてきたものであった。

教育改革の波を受けて講義形態の革新が求めた一つの道は、プレゼンテーションの改良であり、そのための情報技術、視聴覚技術の導入であった。筆者は決してその方向を否定しているわけではないし、その方面においても利用すべきを利用していることは先にも述べたとおりである。しかしながら、情報技術や視聴覚技術が保障するのは伝達手段の改良であって、伝達されるべき内容そのものを磨くことでも、発信者と受信者とが互いに刺激しあってふくらんでゆくような知の交流を促進することでもない。情報技術や視聴覚技術だけに頼っているのは、担当

者自身に内的変革が起こり、受講者自身の知的生活に大きな変化が起こるような講義を期待することはできない。両者の内的革新、知的向上、今後の知的生活の促進へと道を開くことができるのは、講義内容そのものの練磨に加えて、いや、それと密接に関連して、両者のコミュニケーションの創造である。

その一つの道は、担当者の側からの適切な問いかけを不断に投げかけることによって、受講者が問いかけに主体的に取り組むような状況を作り、担当者の伝えようとする講義内容を自分自身とのかかわりで、自分自身の知の体系にとりこめるような受け皿を作ることである。これについては、部分的には、「語学の授業から講義へ」⁷⁾（「追手門学院大学教育研究所紀要 第21号」, 2003）において述べたし、本論と平行して書かれた「講義『ことばと文化・フランス語』が目指すもの——理解を助ける質問をどう準備するか——」においては、別の講義を例に挙げながら詳しく説明した⁸⁾。

本論においては、これら二つの先行論文と部分的に重なりながらも、第二の道を模索したつもりである。それは講義において、知らせること、考えさせること、想像させることの三つの作業をいかに組み合わせてゆくかという問題である。作業の一つは、いかに異文化の波が絶え間なく押し寄せ、日本列島に暮らす人々の暮らしぶりと考え方を少しずつ変えてきたかという事実を知らせることであった。しかし、ここでいう事実とは、年表に並べられた事項という意味ではなく、長い時間の中で変化してきた日本列島の相貌、いわば姿であるとも言えるし、その見方であるとも言えるかもしれない。なぜなら、変わらないものだけを探し、それらを寄せ集めることによって不変であるとか、一元的であるとか主張できるからである。

二つ目には、さまざまな異文化交流の出来事を、決して人ごととして提供したのではなく、常に、その結果が今の自分たちにかかわることとして示すとともに、異文化交流に携った人々の状況を実感させようとしたことである。そのためには、適切な質問と適切な課題が必要であった。この点に関しては、筆者の考え付いた質問や課題が必ずしも適切であったとは考えていない。今後、授業を通じて具体的に改善してゆくつもりであり、その方法と結果については、いずれ報告できるのではないかという期待を抱いている。

最後は、第二の作業を補完し、歴史的状況をよりよく理解してもらうために、そしてまた、不十分な想像力を補い養うために、文学作品と映像作品を利用することであった。これについても、ほんとうに筆者の意図したとおり、受講者が明瞭なイメージを描くことができたのかどうか、あるいはまた、彼らの想像力が以前に比べて豊かになったのかどうか、十分な検証が成されているわけでもない。判断の材料といえば、日ごろの学生とのやり取り、授業の最後に印象を書いてくれるペーパー、授業評価における自由記述などであり、一方的に語る講義に比べて歓迎されていることを読み取るていどである。

こうした方法が十分な効果を発揮しているかどうかはともかく、この報告で特筆したかった

のは、「学生が理解しやすくするためにどういう方法をとるべきか」を教員が常に探ってゆかなければならないということである。そのために筆者がとったのは、知らせること、考えさせること、想像させることの三つを組み合わせることであった。これまでの授業では、あまりにも知識の伝達だけが先行して、思索し想像することがなござりにされてきたと考える。この三つを組み合わせる方法、そして想像力をもっと活用する教育の探究は、今後ますます必要となる。

これまで、自分の講義の内容や方法について語ることは、少なくとも本学においては、ほとんど成されなかった。本論がそうした閉鎖的な状況を打破するための一助となれば幸いである。そのためにも、本論について忌憚のない意見が寄せられ、それを出発点とする討論が本学の講義、特に共通教育の講義について開かれることを心から願っている。

注

- 1) 中村啓佑「大人数講義に挑む——いくつかの試み——」『追手門学院大学教育研究所紀要 第22号』, 2004

- 2) 石井によれば、異文化コミュニケーション研究は4つの時期に大別される。第1期は第二次大戦直後から1950年代までの台頭期、第2期は、1960年代の開始および普及期、第3は1970年代の体系化期、第4期は、1980年代から現在にいたる理論構築期である。

第1期は、大戦後の問題処理と新しい対外占領政策のためにアメリカ外務省の外国勤務研究所で主として外交官や外国勤務予定者に実施され、訓練には文化人類学や言語教育学の研究成果が多く導入された。

第2期は、東西両陣営間の対立の深刻化に加えて、ベトナム戦争や平和部隊に参加した青年たちの現地での異文化接触体験と帰国後の自文化再適応のような異文化コミュニケーションに関する問題が表面化し、研究の重要性が広く認識されると同時に、研究の体系化が叫ばれるようになった。

第3期はアメリカにおける研究の体系化の時代である。通信技術と交通機関の未曾有の発達により「地球縮小化」の現象が急速に進んだ。その結果として異文化接触に関連する摩擦や対立が国内外における異文化コミュニケーションのさまざまな面で表面化した。研究者の主な関心は、留学生、国際ビジネス関係者、移民等のアメリカ主流文化適応に関する問題に向けられた。そうした傾向の中で、従来の断片的研究の体系化と理論化が進んだ。

日本において異文化コミュニケーション研究に対する関心が急速に高まった時代でもある。

最後の第4期は研究理論構築の時期。異文化コミュニケーションの基本理論と応用理論の構築を試みることの必要性を訴えるようになった。

以上のことからわかるように、異文化コミュニケーションの背景にはこうしたここ半世紀の、しかもアメリカがかかえた問題が対象となって進んできたことは明らかである。

石井敏・久米昭元・遠山淳編著『異文化コミュニケーションの理論 新しいパラダイムを求めて』, 第1部, 第1章「研究の歴史的背景」pp.12-14.

- 3) 網野善彦「海の時代」, 『海と列島の中世』, p.52
- 4) 同書, p.53
- 5) 例えば、「訳語(おさ)」の代わりに「通訳」でもいいし、「水手(かこ)」の代わりに「船乗り」と

講義「異文化交流の歴史」

- か「船員」でもかまわない。現代語も見つからないのであれば、説明的表現でもいい。
- 6) NHKの番組「その時歴史が動いた」のビデオ版など。
 - 7) 中村啓佑「語学の授業から講義へ」『追手門学院大学教育研究所紀要 第21号』, 2003
 - 8) 同 「講義『ことばと文化・フランス語』が目指すもの——理解を助ける質問をどう準備するか——」, 『ガリア 高岡幸一教授退官号』, 2006年3月発行予定

参考文献

- 網野善彦『海と列島の中世』講談社, 2003
同 『日本社会の歴史』上・下, 岩波書店, 2003
石井敏・久米昭元・遠山淳編著『異文化コミュニケーションの理論 新しいパラダイムを求めて』有斐閣, 2001
尾藤正英『日本文化の歴史』岩波書店, 2000
川勝平太『日本文明と近代西洋』
宮田登『歴史と民俗のあいだ 海と都市の視点から』吉川弘文館, 1997
菊池勇夫編『蝦夷島と北方世界』, 日本の時代史 19, 吉川弘文館, 2003
豊見山和行編『琉球・沖縄史の世界』, 日本の時代史 18, 吉川弘文館, 2003

参考資料

- 井上靖『天平の甕』, 新潮社, 2003
司馬遼太郎『空海の風景』上・下, 中央公論社, 2003
ルイス・フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』, 岩波書店, 1991
井上靖『おろしや国酔夢短』, 文藝春秋, 2005
井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』, 偕成社, 1999
吉村昭『アメリカ彦蔵』, 新潮社, 2001
同 『漂流』, 新潮社, 2002
福沢諭吉『福翁自伝』, 岩波書店, 1996
『ペルリ提督日本遠征記』1～4, 岩波書店, 1997